

ABIC 国際社会貢献センター Information Letter

No.33 2012年3月

政府機関関連への協力	JICAシニア海外ボランティア(SV)として南米コロンビアへ……………	2
自治体・中小企業支援	茨城県の中小企業貿易支援業務……………	4
	群馬県庁での講演—中小企業支援と貿易実務……………	5
プロジェクトの受託	中国赴任前研修の講師を終えて……………	6
	文化庁日本語教育事業「茨城県定住外国人日本語伸長教室」の修了に際し……………	7
教育	「国際化とは何か、日本人が国際人として何が必要か」猿楽小学校での授業……………	9
留学生支援	東京国際交流館での書初め指導……………	10
	「書初め」の指導……………	10
	初めての在日留学生「新春書初めコンテスト」講師……………	11
	「書初め指導」に参加して……………	11
私のボランティア活動	JEARN国際教育フォーラム リアル熟議「学校の国際教育への提言」に参加して……………	12
	親の顔が見てみたい程「最近の若者は外向き志向」……………	13
	カンボジアの識字学校を訪ねて……………	14
新刊紹介	『カダフィに狙われた男』—カダフィ独裁政権の真実—……………	3
	『元商社マンが発見した古代の商人たち』……………	8
	事務局だより……………	15
	ABIC会員懇親会（東京）、関西会員懇親会を開催……………	15
	新入会員（法人正会員）のお知らせ……………	16
	賛助会員入会のお祝い……………	16
	法人・個人正会員/賛助会員一覧、活動会員数……………	16

特定非営利活動法人 国際社会貢献センター (ABIC)
Action for a Better International Community

<http://www.abic.or.jp>

〒105-6106 東京都港区浜松町2-4-1
世界貿易センタービル6階(社)日本貿易会内
Tel: 03-3435-5973 Fax: 03-3435-5979
e-mail: mail@abic.or.jp

【関西デスク】
〒541-0053 大阪市中央区本町4-4-24 住友生命本町第2ビル9階
Tel & Fax: 06-6226-7955
e-mail: kansai-desk@abic.or.jp

政府機関関連への協力

JICAシニア海外ボランティア(SV)として南米コロンビアへ

JICA シニア海外ボランティア コンロンビア渉外促進 ^{すすき}鈴木 ^{かすみ}一三 (元 日立ハイテクトレーディング)

2010年3月から南米コロンビア第3の都市カリで、SENAという国立職業訓練センターの当地の地域局で活動する他のSVの活動支援をする渉外促進として活動している。

SENAは日本でいう高専・専門学校のようなところで、国内に33の地域局を有し、117のセンターで授業料無料で多くの生徒（ほとんどが若者でどちらかと言えば貧しい家庭の子供が多い）が技術、能力を身につけるために学んでいる。この地域局では年間50万名ほどの生徒が学んでいる。科目としては、電気、機械メンテ、放送技術、プログラミング、看護、料理、観光、土木工事、溶接、自動車修理など非常に多い。

ここでこれまでに延べ9名のSVの方たちと一緒に活動をしてきている。渉外促進としての仕事は、各SVがJICAの要請内容、およびこちらに来てから配属先との間でJICAも交え決めた活動内容に沿って、その知識と経験をこちらの主として先生に伝える。また時には企業訪問する際の支援で主として言葉の面を、実際には各SVの打ち合わせ・会議・講演、セミナーなどでの通訳、そして資料等の翻訳などの支援を主として行っている。

ただ、これらSVの方の分野が、品質管理、物流・貿易、建築、工業デザイン、電気・オートメーション、金型設計などと多義にわたっており、十分にこなせないところはSVの方やコロンビアの人たちに助けてもらっている。また、配属先内の各種情報伝達なども行っている。他のSVの方はそれぞれのセンターの配属だが、私はこのような仕事柄、地域局長のいる事務局に席を置き、種々の状況に対応できるようにスタンバイしている。また、JICA事務所とのやりとりも結構多い。

他のSVの方との活動がない時間などは広いキャンパスの中をぶらぶら歩き、生徒、職員、先生たちとの何気ない



JICA九州での研修に行ったことがあるSENAカリの電気・オートメーションセンターの先生William Gutierrezさんと一緒に

会話を楽しんでいる。SENAには福利厚生として先生、職員のスポーツなどの会があり、私もコロンビアの国技であるTejo（テホ）^(注)やボーリングに、時々だが、参加させてもらっている。

^(注) Tejoと呼ばれる鉛で出来た円盤状のものを女性用では約13m、男性用約20m以上先の粘土を入れた四角の箱に投げ込むゲーム。その箱の真ん中にマグネシウムで出来た円があり、その縁に火薬を包んだ三角の紙を置く。ゲームとしてはこの円の近くに投げた人が勝ちで、一番点数がいいのは火薬を爆発させ、なおかつその円のなかにすっぽりとTejoを入れた場合。やること自体は非常にシンプルであるが、実際にやってみるとなかなか難しく、はまってしまう。

さて、ここコロンビアは残念ながら世界でも有数の治安の悪い国で、中でもここカリは殺人など毎日のように発生し、気が抜けない毎日を送っている。この治安の悪さは、反政府組織（FARC）のテロ、麻薬組織の抗争、都市の犯罪集団同士の抗争などによるものだが、その根本は貧困にあり、これをどうにかしない限り（これが一番難しいが…）治安の悪さはなくなる。



SENAカリの女性Tejo選手メンバーたちと。私の左がSENAカリの地域局長で選手でもあるEsperanzaさん。私は私設応援団長



Tejo競技の専用台の前で。プレー仲間のSENAの女性たちと

JICAでは市内でも立ち入り禁止区域の設定、夜間外出禁止などの手段を講じている。また近郊へもバスなどの陸上の移動は禁止されており、幾分窮屈な生活を強いられている。そんな中でも、ここコロンビアには多くの見どころがあり、私自身もリゾート地であるサンアンドレス島やサンタマルタ、世界遺産のカルタヘナ、ボゴタ近郊の変わったシパキラの塩の教会など気分転換もかねて足を運んだ。

一年中半そで暮らすことができるカリ、果物が豊富なカ

リ。生活は苦しくても陽気なここカ리의人たち、ただ他の中南米の国の人と比べてもなんだかより約束を守らない、時間を守らない(と私は思う)ここカリ(コロンビア?)の人たち、ただこの人たちがいなければこの2年間を過ごすことができなかったと思うと感謝の気持ちで一杯である。

そして、今回はこのJICAボランティア事業、JICAボゴタ事務所・職員なども知ることが出来、本当にいい勉強をさせてもらった。2012年2月コロンビア・カリにて。



配属先のSENA (国立職業訓練センター) のカリにある
地方局 (学校) のキャンパス入り口



キャンパス内、奥がカフェテリア

新刊紹介

『カダフィに狙われた男』 —カダフィ独裁政権の真実—

著者：浮貝 泰匡 (ABIC 会員、元 ニチメン) 著

出版社：戎光祥出版株式会社 (Tel.03-5275-3361)

2011年11月20日発行 158頁 定価：1260円 (税込)

アラブの春はチュニジアの“パンと自由と尊厳”を求めたジャスミン革命に端を発しエジプト、リビアへと長期独裁政権崩壊の連鎖を招来、今やとどまる所を知らずシリア、イエメンへと迫る勢いである。

2011年10月20日、41年もの長きにわたるリビアの独裁者カダフィが死んだ。カダフィの壮絶な最後は中東の諸国のみならずアジアの絶対君主たちを震え上がらせ諸国の反体制派を勢いつかせている。

本書の著者 浮貝泰匡氏 (現日永インターナショナル株式会社社長) はリビア王政時代に商社マンとしてトリポリに赴任、5年間駐在した。

王政派の盟友と組んで多くの実績をあげイドリス国王時代を謳歌した。カダフィ大佐のリビア革命は1969年9月1日の朝に起きた。王政派関係者に対する容赦ない追及、外資、外国人排除宣言とこの日を境に浮貝氏の舞台は暗転、リビアの盟友とともにカダフィに迫られる身となる。決死の脱出行に挑む、波乱万丈の人生の始まりである。

革命の導火線となる第3次中東戦争、PLOアラファト議長の助力を得てカダフィとの直接対決、盟友の妻を刺客から救え、戦慄のトリポリ脱出…と続く。驚きの連続、迫力のノンフィクションである。

もともと部族間抗争の多い国、カダフィ独裁政権崩壊後のリビアは何処へ向かうのか。今リーダー不在、分裂の恐れもありともいわれる明日のリビアを何う一冊でもある。コラム欄でリビアの国、イスラムの民族、文化を紹介しているのも面白い。



自治体・中小企業支援

茨城県の中小企業貿易支援業務

(財) 茨城県中小企業振興公社 食品輸出アドバイザー **いしかわ 石川** **きよし 清** (元丸紅)

2011年4月より茨城県の中小企業貿易支援業務に従事してからほぼ一年になる。就任後、企業の皆様と今後の支援業務をどのように進めるべきかを検討するために有力企業20社に集まっていただいた。お互いに胸襟を開いて意見交換した結果、次の方法で支援業務を進めることにした。

- ① 定期的に貿易実務セミナーを行う。
- ② ほとんど貿易経験の少ない企業が多いためセミナーの30%程度貿易実務知識を解説。
- ③ 小職の手持ち資料から海外・国内企業の貿易実務成功事例を写真入りで解りやすく説明。それを各社の貿易取組の参考にする。
- ④ 貿易実務相談にはいつでも来社いただく。必要あればこちらから訪問支援する。
- ⑤ 各社で貿易取引開発に成功した場合、成功者即ちファシリテーターとして定期セミナー時に発表していただく。

この方法は小職がJICA専門家業務としてアジア諸国で数年間実施したのと同じ内容である。業務開始後できるだけ企業訪問した。3.11の震災直後でもあり、多くの生産工場の一部損壊と沿岸部の津波による被害が多いことを知った。さらに福島原発事故により時間経過とともに水産物と農産物全般に風評被害を受けた。このため海外諸国の当県産品の輸入禁止または検査条件などを突きつけられ、食品類の輸出は事実上困難になった。

生産者の皆様のバイタリティーは旺盛である。輸出がダメなら国内販売に当面注力するので協力して欲しいと強い要請を受けた。その結果、首都圏の売り先主体に農産物



支援中の企業表彰された皆様と筆者(中央): 支援中の企業が「経営企画アイデア優秀賞」を県から表彰された。その表彰式と経営企画アイデアの発表会で企業の皆様と記念撮影。皆貿易振興事業に意欲的。



定期貿易実務セミナー(2011年12月): 定期的に30社程度の企業向けセミナーを行っている。中身の30%程度は貿易実務知識で、今回は「インコターム規則」、「最近の課題のFTA/TPPの解説」、「毎回行う貿易成功事例から学ぶ」であった。

販売を支援して現在に至っている。県内は豊かな水と肥沃な農地に恵まれている。野菜と果物の生産は豊かである。栗の生産量1,600トン、レンコン、メロンなど生産量は日本一である。

最近、北関東自動車道が開通。既存の常磐自動車道、東関東自動車と合わせて首都圏へのアクセスは至便。スーパー、市場向け販売の他、現在、外食レストラン、加工メーカーへの商談を進めている。

一方、技術の高い機械、部品メーカーが多い。大手電機メーカー向け部品や大手ショベル系掘さく機、複写機、医療器具、電力ケーブルメーカー向け部品メーカーが多く活躍している。従来大手メーカー向けに国内供給していたが、最近の海外工場移転に伴い輸出業務が求められる。また県内には潜在的な高技術と優れた製品が多いことを認識した。海外ではその優れた技術・部品を十分知られていない「臥龍企業」である。今後、貿易実務と海外営業力を培った場合、海外市場に販売拡大できる可能性は極めて大きい。

昨年後半から支援企業が次々に貿易取引実績を上げた。飲料機用特殊チューブの欧州からの輸入、南米向け日本酒輸出、リサイクル原料や医療器具部品のアジア向け輸出、アジアから発電機や変圧器の輸入、中古車のアフリカ向け輸出などが実現した。年末のセミナーには数社が胸を張って成功事例を発表した。とても初めての成功とは思えない自信を持った発表であった。

発表者からは海外貿易をやってみて商売の視野が大きく広まったという感謝の発言があった。一方、参加した他の企業からは、次は自分たちも頑張って成功したいという

抱負も聞かれた。またこのセミナーに輸出入業務に係った乙仲からも数人参加し、企業の成功を共に喜び合った。参加者全員が貿易業務に自信を持ったことは嬉しい。

昨年後半から大幅な円高（ドル安）の環境にある。またFTA/TPPの課題が多くなり、毎回セミナーにはこれらの関

連情報解説と対応策を話題にしている。次々に起こる環境変化に対して企業の皆様はタフに対応している。茨城県のこの一年の標語は「がんばっぺ！ 茨城」。県民性から皆誠意誠実である。

県の職員関係者も中小企業の貿易振興に真剣である。茨城県の中小企業貿易振興事業の未来は明るい。

自治体・中小企業支援

群馬県庁での講演—中小企業支援と貿易実務

さとう
佐藤

とおる
徹

(中小企業支援担当コーディネーター、元伊藤忠商事)

ABICの活動範囲を拡大するためパンフレット・ホームページなどの広報活動、ABIC関係者による地方自治体等への売り込み活動等を行っているが、最も効率が良いと思われるのが中小企業支援事業を既に提携して行っている各自治体からの口コミによるABIC推薦であり、以下はその一例である。

某月某日、群馬県産業経済部産業政策課から11月下旬に同部の職員対象に中小企業支援についての講演をするよう依頼が来た。7月初めに群馬県企画部総合政策室と東京事務所、下旬に同県生活文化部国際課からの来訪があり、ABICの中小企業支援の概略につき説明は行ってあった。

同県の説明では平成23年度の重点国際戦略方針として①農産物輸出 ②県内中小企業（富士重工業をはじめ自動車産業関連が多い）の海外でのビジネス展開支援 ③観光振興（外国人誘致）の3点を挙げ、県庁職員対象に勉強会を不定期開催しているとのことであった。

重点方針の一つとして挙げられる中小企業支援についての講演依頼であり、群馬県と更に密接に業務推進を図りたいとの思惑から引き受けることとし、相棒の高廣コーディネーターと相談して小職が担当することにした。それは与えられた演題とも関係する。

演題は「中小企業支援と貿易実務」というもので、たまたま小職が2011年3月まで渋谷にあった専門学校（少子化の影響で同年3月で閉校）の講師を10年間勤めた担当科目の一つに「貿易実務」があったためでもある。「中小企業支援」と「貿易実務」とは如何なる関連性があるのか？ 思い悩むところではあるが与えられた演題であるのでこれに沿った話しをすることとした。

群馬県といえば毎年年末に趣味の歌仲間が気が合う数人と草津温泉へ忘年会をかねて出かけ、そのすばらしい泉質と豊富な湯量に大満足で年を越すというつながりしかなかったが、一体どういう県なのかざっと調べてみた。

歴史的には旧石器時代からの遺跡があるが、荘園時代から中世の新田一族、山内上杉氏、北條氏、武田氏、上杉氏



等の武士集団の争いを経て近世へ入り徳川家の武将が治めることとなり明治維新へとつながってゆく。

人口は2010年国勢調査では200万人強。今や人口100万人を切る県が全国で8県あり、2010年の国勢調査で辛うじて100万人の人口をキープしていた和歌山県も2011年12月時点の推定では100万人を切っており、人口200万の県は大きい方といえる。

県内GDPは平成20年度で約7.2兆円、1人当たり県民所得は約270万円である。福田赳夫、中曽根康弘、小淵恵三、福田康夫の4人の総理大臣を輩出、空っ風と女性上位で有名だが、女性の運転免許証保有率は全国一とのことである。

さて、講演に関しては、①ABICについての概略説明 ②中小企業支援の現況 ③貿易実務という順番で約30名の県庁職員を対象に約1時間強行い、30分弱を質問等に割り当てた。

②に関しては具体名を挙げず守秘義務違反にならない範囲でABICの活動実態を紹介した。

③については専門学校の授業では一冊の教科書を年間35コマ（1コマ90分）で仕上げるものをとて20～30分の時間では無理なので与信等に的を絞って説明、質問も活発で盛況裡に終了した。

自治体・中小企業支援

中国赴任前研修の講師を終えて

のじ 野地 てつおみ 哲臣 (元 東洋インキ製造)

2012年1月13日にパソナグローバル事業部主催による、「中国赴任前研修」の講師を務めたので、その雑感を記してみたい。

この企画は当社が、独特の文化とビジネス慣習を持つ中国にスポットを当て、これから赴任する実務担当者、経営者に、系統的に研修サービスを行うという、新規プロジェクトとして立ち上げたもの。1月より毎月5回にわたる研修スケジュールが企画され、私は、ABIC活動会員として、その初回の講師であるための使命感もあり、緊張感をもって講義に臨んだ。

実施に至るまで、パソナ社との面談、メール等による詳細な事前打ち合わせを通じ当社がいかにこのプロジェクトに力を入れているかが実感された。当日は、年明け早々ということと、赴任時期のピークからは外れていることもあり、受講者は7名に留まった。メーカー、商社からの赴任者であったが、私が想定していたよりもはるかに若手の受講者が多いのに多少驚いたことと、一方で嬉しかったのは、赴任者のみならず、中国市場を重要視している企業の本社人事担当の方が受講されていたことである。異文化において赴任者が能力を発揮できるためには本社人事部が異文化対応を理解し、適材を派遣することが必須だからである。

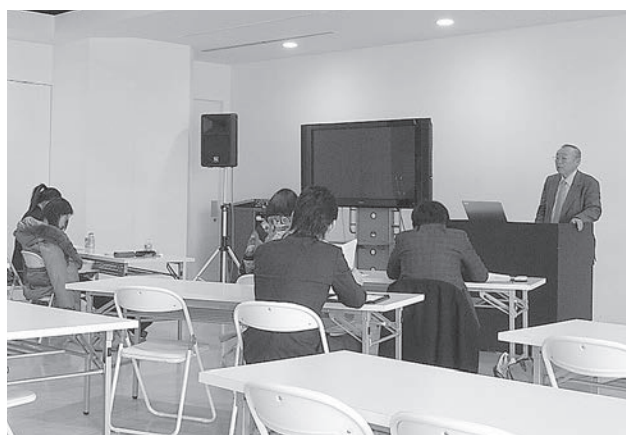
私の担当は、中国赴任のための健康管理、異文化対応、危機管理に至る系統的研修の中で「現地社員のマネージメント」に関する講義で、受け持ち時間は質疑応答を含めて1時間半ゆえ、細大漏らさずカバーすることはできなかった。

特に配慮した点は、「総花的にならないこと、それでいてポイントは押え、机上の講義ではなく、できるだけ受講者が現地で失敗しないように、実例をお話する」こととした。そこで、副題として、「中国ビジネス文化にマッチし

た、尊敬されるリーダーになるには」と題し、具体的には、赴任直後の「はじめての姿勢」が肝心であること、現地社員からダメ印を押されないための資質は何か、中国文化特有のメンツを大事にすることはどういうことか、「コネ文化」の利用の是非について、等実例を踏まえたものとした。

日本からの幹部赴任者にとって最も共通した頭の痛い問題は、採用、昇給、解雇等の労務管理で、それゆえ採用時と解雇するときの注意事項にも重点を置いた。途中で「現地人の就業態度でこういうときはあなたならどうする？」というような疑問も投げかけ、受講者にも臨場感を持ってもらうよう腐心した。残念ながら講義時間が短かったため、受講者から回答、意見を求めての双方向によるフリートーキングは実施できずに終了した。

今回はパソナ社の新規プロジェクトでもあるので、担当のABIC西山コーディネーターも研修を傍聴された。2月、3月以降の研修スケジュールにはかなりの受講申し込みが見込まれているとのことゆえ、ABICにて、中国以外の諸外国向けでも、同社向けの海外赴任前研修分野での一層の貢献を期待している。



e-mailアドレス・住所等の変更届けはお忘れなく！

**e-mail アドレス・住所などの変更がありましたらご連絡ください。
転居先不明で返送される例が増えています。**

e-mail : mail@abic.or.jp FAX. 03-3435-5970

プロジェクトの受託

文化庁日本語教育事業 「茨城県定住外国人日本語伸長教室」の修了に際し

もり かずしげ
森 和重 (中南米担当コーディネーター、元 三井物産)

2011年度文化庁の「生活者としての外国人」のための日本語教育事業「茨城県ブラジル人等定住外国人児童日本語伸長教室」を6月から5カ月に亘り開設したことは既に本誌32号(2011年11月)にて紹介したが、昨年11月29日に無事修了式を行ったので、本事業の成果と今後の見通しなどについて報告したい。

リーマン・ショックと3.11東日本大災害の影響で、2008年初頭には32万人に達した在日ブラジル人も現在21万人に減少したと言われているが、定住化が進んでいる状況は変わらない。来日した子どもたち(一世)および1990年以降の日本生まれの定住二世・三世など学齢期にある子どもたち(約2.5万人)が数年後には日本社会に参入するのは間違いなく、十分な教育受けず、また社会適応性を持たない人材の参入は地域社会にとり将来大きな社会リスクになることは予想できる。

従って、日本語教育と進学・職業教育(職育)の充実により、心身共に健全な青少年を育て社会に送り出すことが地域社会にとり重要な課題であり、地方行政・地域社会・地域ブラジル人社会などと連携して、多文化共有・共生の一環として協働して取り組むことが求められている。ABICも3年に亘り茨城県で実施した「虹の教室」を通じてできたネットワークを通じて、既に地域の行政・地域社会と本件に取り組んでおり、その中の日本語教育充実の一環として、本日本語教育事業を取り上げたものである。

1. 「日本語伸長教室」事業内容：

本事業の目的としては、地域社会に生きる子どもたちがまずは日常生活会話や読み書きができるようにすると同時に日本語能力検定受験を目指すことにあった。



日本語教室授業風景 大学生を交えての会話

- 1) 受講生数：15名 (Aクラス8名、Bクラス7名)
修了生数：10名 (Aクラス4名、Bクラス6名)
- 2) 授業時間：各クラス50時間 (6月1日～11月29日まで毎週2.5時間×20回)
日本語教師2名・補助教員1名による授業、ボランティア大学生とのグループ会話、日本語の発表会などを通じてのレベルアップなど。
- 3) 教室設置場所：茨城県就労・就学センター (常総市)

2. 「日本語伸長教室」の成果と課題：

1) 学習目標の達成状況：

6カ月の短期間であったが目標のカリキュラム達成し、復習・テストにより受講生の習熟度を確認できたので、日本語レベルは6カ月前に比べ大幅に向上した。定量目標の日本語能力検定試験N5以上の合格者を出すことができたので、子どもたちの日本語学習の意欲が大幅に高まったと言える。

7月日本語能力検定試験受験者 N4→4名 3名合格
12月日本語能力検定試験受験者 N4→2名 N3→4名
(未発表)

2) 教室運営の成果：

地域に日系ブラジル人等の青少年が、ブラジル人学校や日本公立学校で習得した日本語能力向上のために学習する場所がほとんどなかったが、本教室の設置により学習の場ができたので彼等の学習意欲を満たすことができた。将来的にも地域社会の一員として日本・ブラジルの架け橋となる人材に成長する一助となったことは喜ばしい。

また、日頃ブラジル人社会だけで孤立し地域社会との交流の少ない受講生が、週一でも日本人と接し、日本語学習



修了証の授与

だけでなく日本社会の生活慣習（文化やニュースも含め）触れることにより日本に対する理解が深まったと考える。さらに、テスト問題なども日本語からポルトガル語に翻訳されたものを使うなどの工夫により、より正確な母国語を理解する機会もあった。

地域との連携については、ブラジル人学校、ブラジル人コミュニティ、地域NPO・ボランティア、県庁、市役所、市教育委員会、公立学などとの交流が深まり、日本語教育の重要性が認識されて本教室の継続の緒ができたかと考える。なお、今回の交流を通じて、市役所の担当職員や公立学校の先生方が、本事業に関わったブラジル人教師のポルトガル語教室に参加するなど多文化共生への新しい動きが出てきている。



修了式の挨拶

3. 今後の課題と見通し：

今回は「日本語伸長教室」を目的としたため、レベルに合わないために受講できなかった人もあったので、今後は能力に応じた「日本語教室」の開設も必要になると考える。茨城就労就学センターも別予算で日本語教室を設置しているので、相互に協力をしながら教室の継続を図りたい。

さらに、懸案の定住外国人子どもたちに対する支援プロジェクトとして、①日本語教育の充実だけではなく、②社会適応と進学指導、③職業教育（職育）、④母語教育なども含め、県国際課、地域の市役所、教育委員会、商工会、筑波大学、NPO・ボランティア団体などとの協働体制もできつつあり徐々に実現化を図っていきたい。



修了証を手にした子どもたち

新刊紹介

『元商社マンが発見した古代の商人たち』

著者：布施 克彦（ABIC 会員、元 三菱商事） 著

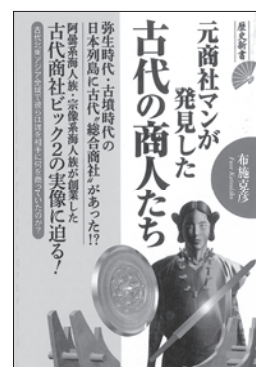
洋泉社歴史新書

2012年2月8日発行 265頁 定価：820円（税込）

総合商社は、日本固有の業態と言われる。もちろんその出現は近代以降だが、機能そのものは近代以前から存在したはずだ。現在の総合商社の中にも、創業を明治以前に遡るものもあるが、総合商社の起源はその遙か以前の古代にまで辿ることができるのではないかと。様々な物資が、原産地を遠く離れた古代の遺跡から発掘されるという考古学的事実がある。それらの物資を、誰がどのような目的で遠隔輸送したのか。古代にも、サプライヤーとカスタマーを結ぶ商社機能が存在したのだと思う。

筆者はその仮説を裏付けるため、この十年ほど国内各地を巡り、古代商社の足跡を追い求めた。その結果、古代にも現代の総合商社を凌ぐかもしれない機能の存在が、ほんやりとではあるが浮かび上がってきた。そこに古事記、日本書紀、各地の風土記、中国古代王朝の史書などの記述を繋ぎ合せ、さらに足りない部分は元商社マンの経験や勘で肉付けすることで、本書は出来上がった。

日本を中心とする極東の古代史において、交易や物流は今まで空白の部分であった。記録がないのだから仕方がない。本書の記述の多くも、想像の域を出ていない。それでも、今まで歴史の専門家がほぼ無視してきたこの領域に、歴史を大きく動かした要素が潜んでいるのではないかと。古代という非情報化社会だからこそ、商社機能はより強大だったはずである。



教育

「国際化とは何か、日本人が国際人として何が必要か」 猿楽小学校での授業

さかた しゅういち
坂田 修一 (元トーマン)

2011年12月10日土曜日、渋谷区立猿楽小学校を訪ねました。私が頂いた課題は、「国際化とは何か、日本人が国際人として何が必要か」、6年生社会科の授業です。既に世界地理を勉強していますので、私が体験した各地での学校、スポーツ、音楽などを交えて話すようにしました。時間は朝の第1～2限の90分です。

第1限では、私が冒頭に「外国に行ったことがある人は？」と聞いたところ、クラスの35人のうち20人以上が、「では外国に住んだことは？」に男の子2人が、手を挙げました。猿楽小学校の6年生は、海外旅行を経験したり、猿楽町で外国人を多く見たりで、外国を身近に感じているようです。

「国際化とは異なる地域のヒトとモノとカネが行き来して、文化と情報が交流することです」と、私は始めました。持参したマトリョーシカに子どもたちから「あ！ロシア人形だ！見たことがある！」と声があがりました。「ロシア人が箱根で見かけた寄木積み木からヒントを得て、入れ子人形をつくったと言われています。日本工芸品の文化、寄木の技術がロシアに伝わり、代表的な土産品となり、外貨獲得、ロシア人形文化を輸出できるようになりました。ヒトとモノとカネと文化の国際交流の例のひとつです」

次いで「異なる地域の習慣と文化を理解し互いに敬意を持つようにしましょう。外国のあいさつ、マナーの例をご紹介します」と、おじぎ、握手、胸の前で手を合わせる合掌などを最前列の男の子と実践してみせたところ、女の子が隣席の女の子と抱き合っただけでハグをみせてくれました。私は「あいさつのかたちは様々ですが、世界共通のポイントは、親しみを込めてアイコンタクトすることです」と、続けました。

さらに、世界各地のジャンケンのイラストをOHPで大型モニターに写し、指と手の形をつくり「隣の席のお友達と試してみよう」に、子どもたちが盛り上がってくれました。

また「外国と日本の小学校では、異なる点があります。

たとえばアメリカでは小学校の先生と生徒の多くが黒板に大きく○（丸）を何故か描けません。場所を説明するのに地図でなく言葉で説明します。日本の6年生なら誰もが持っている三角定規、分度器、コンパスをアメリカの子どもは見たことがありません。日本にある《学期》がなくて通知表がありません。また教室の掃除を子供は一切しませんので、用務員さんが掃除します」と、言う子供たちは驚いたようでした。私は「日本とアメリカ、どちらが良いか悪いかではありません。お互い文化が異なるからこそ国際交流は面白いのです」と強調しました。

第2限では、「今も各地で争いが起こっています。平和の願いを込めてつくり、世界中で歌われ愛されている歴史に残る名曲《イマジン》で英語と音楽の勉強をしましょう」として、楽譜、原文と私の訳詞を全員に配ったら、アメリカ現地小学校にいた男の子が直ぐに手を挙げ歌詞をネイティブの発音で読んでくれました。「人間同士が、国や領土や宗教で憎み殺し合うのは無意味だ、壁のない世界を想像してみよう」と歌詞の理念を説明し、持参したCDを聴いてもらいました。全員で歌いたかったのですが、時間が迫っておりできなかったのは残念でした。「ご両親は必ずご存知の曲です。英語の意味を確かめながら一緒に歌ってください」と締めました。

授業後の先生方との懇談で、担任の若い男性の先生ご自身が帰国子女で、国際化とは何かを常に考えておられたそうでした。校長先生は、猿楽小学校の6年生の多くが私立中学受験で土曜日は学校より塾を優先する親もいる。この時期に国際化について話を聞いてよかったと、おっしゃっておられました。

私自身、子どもたちがどう理解してくれたのだろうか、国際化をどう考えるのだろうかと思いを巡らせました。大変貴重な経験をさせていただけたことに改めて感謝いたします。有難うございました。

留学生支援

東京国際交流館での書初め指導

1月15日（日）、70カ国からの留学生や研究者とその家族1,000人近くが住む東京国際交流館では、留学生に日本の正月を体験してもらい、居住者同士や、退館したOB、地域住民との交流を深めるため、恒例の正月イベントが開催された。

居住する日本人学生が分担して、餅つき、書初め、凧作りを始め、独楽、ベーゴマ、羽子板、福笑い、双六、けん玉、だるま落とし、めんこなどで子供たちと遊び、中庭ステージでは和太鼓演奏、酒樽鏡割り、ジャグリング、琴演奏、駅伝など、盛り沢山の行事やパフォーマンスで賑わい、ついた餅は雑煮、焼き餅、黄粉餅などで振る舞われた。

ABICは昨年同様書初め指導を依頼されたが、月例書道

教室の川嶋則男講師お一人では多人数に対応しきれないので、ABIC会員に呼びかけて、書道師範や書道指導にご経験豊富な太田艶子、鈴木松子のお二人にもご参加いただいた。

用意した14席は常に満席近い盛況で、50名を超える留学生たちが書道を楽しみ、講師は4時間以上立ちっぱなしでお疲れは当然ながら、熱心な学生たちとの交流を楽しまれた。作品はすべて展示され、その中から、書初め大賞、ユニーク賞、ワイルド賞それぞれ3作品が中央ステージで表彰された。

講師からは次のような感想が寄せられた。

（留学生支援担当コーディネーター たなか たけお 田中 武夫）



凧作り



中庭ステージで和太鼓演奏



書初めの表彰式

「書初め」の指導

かわしま のりお
川嶋 則男

（ABIC書道教室講師、元 日商岩井）

本年は縁起良い龍（辰）の年。その小正月の15日、交流館主催新年イベントの一つ、「書初め」の指導に臨んだ。大震災の余波を受け、留学生や研究者他が日本を離れ、居住者が相当に減ったため、「書初め」参加者も総人数とし

ては昨年に比べ減少した。それでも、正午の開場と同時に友人同士のグループが着席すると、徐々に入り出し、昼食後のピーク時にはほぼ満席状態。その後も、入れ替り立ち替りの盛況ぶりであった。

私は、イタリア・スウェーデン・中国・ベトナム・タイ・ロシア・韓国・フィリピン・ガーナ・日本と計10カ国の参加者を指導した。基本の机に向かう姿勢と片方の手の置き方から始まり、筆を持ち添えて字を書く感覚と字形を学んでもらう。左利きには、私も左手で対応。そうして字が書き上がると、「オー！」とか「ウアー！」と、驚歡の声が出る。私が作品を両手で掲げ、周りに注目をしてもらおうと拍手喝采。私と参加者が共に充足感を味わう瞬間であった。

私は、字を大きく、太く、勢いよく書く、そして楽しくを、指導のコンセプトにしているが、今年も参加者の中から、作品を両手で持って私との記念写真の申入れや月例書道教室申込み希望があった。

年明けの日経新聞に興味深い記事が載っていた。留学生



が日本を選んだ最大の理由は、『勉強や研究の環境』が整っており、『文化への興味』を満たすコンテンツがあるからだ。

初めての在日留学生「新春書初めコンテスト」講師

おおた つやこ
太田 艶子 (元 住友商事)

1月15日(日) 12:00~16:00、東京・お台場の東京国際交流館で留学生等を対象に、ABIC主催の『新春書き初めコンテスト』が行われました。私は、今回初めてこのコンテストでの書道講師を、他のお二人の方とともに務めさせていただきました。

日本の文化である“書”を外国人に教えるのは初めてで、どう教えれば理解してもらえるかが心配でした。が、生徒達は、筆の使い方を覚えると、用意したお手本を見ながら、楽しそうに取り組んでいました。参加者が多くて準備した手本が足りず、急遽コピーしたりするほどの大盛況ぶり！

『今年一年の目標としたい言葉の書き方を覚えたい』という生徒もかなりいらっしゃいました。自書を座右の銘として置いておきたいということなのでしょう。

作品は、教室の外のパネルに張り出され、「書初め大賞」、「ユニーク賞」、「ワイルド賞」の三つの入賞作品を選んで、表彰式が行われました。『こんな賞品をいただきました！』と嬉しそうに見せてくれた生徒。日本での生活で、この日は特に思い出の日になったに相違ありません。

私は長年書道を勉強してきて、今では「読売書法会会友」、「書道師範」になっています。これからも、書を通じ国際交流のためにいさかかでも貢献できればと思います。

楽しい時間を共有し、心地よい疲れを感じながら帰宅の途についた幸せな一日でした。末筆ながら、本コンテストの成功にご尽力されましたご関係者の皆様に、再度感謝申し上げます。



書道の本質は、心穏やか、悠々として焦らず、ゆったりとした気分。微力ながら書道文化の継承と発展に役立ちたいと思っている。

「書初め指導」に参加して

すずき まつこ
鈴木 松子 (ABIC日本語教師養成講座講師)

1月15日(日)の正月イベントの中で、初めて「書き初め指導」のお手伝いをし、とても楽しい半日を過ごさせて頂きありがとうございました。

私は三人のお手伝いをしました。私の書に対する「意連(筆は行きたいところに行く)」の重要性をもとに、筆の持ち方、字の意味を伝え、姿勢を正してゆったりと書いて欲しいということ、練習を重ねる毎に、真剣さが増し、どんどん良くなっていきました。書き上げて壁に貼り、一緒に写真を撮って満足そうに去って行く女性の後ろ姿を見て、今後も続けて欲しいなと思いました。また、三人のうち二人が「書き初め大賞」「ワイルド賞」に入賞し、広場での表彰式に臨み、賞品を持って、「ありがとう」といってくれた笑顔がとてもすてきで嬉しかったです。

アメリカに留学していた大学で、毎年インターナショナルフェスティバルが行われていて、日本ブースでは書道が人気で、常に長い列を為していたことを思い出します。子供達は特に興味を持ち、自分の名前を日本語(漢字)にして欲しいとの意見が多く、漢字の意味を考えながら伝えたものでした。沢山の書道具を持参して行ったので、数人に個人的に指導もしていました。

交流館の留学生の皆さんには、日本の歴史的文化「書の心」を楽しく学んでもらうべく、これまでの皆様方のご尽力に感謝申しあげ、今後ご指導のほどよろしくお願い致します。



私のボランティア活動

JEARN国際教育フォーラム リアル熟議「学校の国際教育への提言」に参加して

なんば やすお
難波 靖雄 (元 三菱商事)

2011年11月中旬、ABICよりJEARN（ジェイアーン・グローバルプロジェクト推進機構）が主催する国際教育フォーラムの案内があった。筆者自身、フランクフルト日本人国際学校で文科省の嘱託（国際交流ディレクター）として3年間、小・中学生の国際理解教育と現地校との交流という仕事に直接携わった経験があり、国際教育には日頃から深い関心があるため、参加することとした。その内容を以下報告したい。

JEARN：世界最大の国際教育ネットワーク、iEARN（アイアーン）の日本センターとして、日本で初めての本格的な国際協働プロジェクトを推進する教育NPO

開催日時：2011年11月26日（土）10:30～17:00
開催場所：内田洋行ユビキタス協創広場CANVAS
（東京都中央区）

プログラム：

10:30-12:30 ・鈴木寛前文科省副大臣の挨拶
・生徒と教員による体験発表
・学校の国際教育への提言 熟議

12:40-13:40 ランチタイム

14:00-17:00 iEARN世界大会報告
JEARN2011年度活動紹介

プログラムの最大の山場は熟議であった。以下の通り5グループ（各6～8名）に分れ、それぞれ異なったテーマについて話し合われた。予定は昼食前までの2時間であったが、どのグループも議論が白熱し、とてもその時間内には収まらないため、昼食をとりながらランチタイムをフルに使って熟議が続けられることとなった。

グループ1 カリキュラムに国際教育を科目として加えることを可能にする

グループ2 ICT環境を使ってグローバルなオンライン協働学習を可能にする

グループ3 教員研修に国際教育を取り入れることを可能にする

グループ4 国際教育コーディネーター育成を可能にする

グループ5 グローバルな教育国際会議への教師・生徒の派遣と国際教育への予算化

紙面の制約があるので、全てのグループの討議内容について記すことはできないが、筆者がメンバーに加わったグループ4で出された意見、あるいは提案の主なもののみ記しておきたい。



熟議グループ4

- (1) 国際教育コーディネーターは、学校と学校あるいは先生と先生の橋渡し役である。
- (2) 従って、学校の特質なり内容を熟知している必要がある。
- (3) また日本あるいは日本人についての深い知識を有するのはもちろん、パートナーとなるべき相手国の実情をもよく理解している必要がある。
- (4) 具体的には、日本から海外の日本人学校に多くの教員が派遣されているので、それらの人材を活用することは一つのアイデアであろう。
- (5) またJEARNは、世界の学校と先生方を繋ぐ太いパイプを持っているので、そのネットワークを活用するのモ一案である。
- (6) いずれにせよ、国際教育コーディネーターの育成には文科省のバックアップが不可欠である。

この様な議論の場が設けられたのは2010年が最初で、筆者が参加したのは2回目の場ということになる。まだ始まったばかりであるが、JEARNとしては、これから議論を深めていって、最終的には文科省に対する政策提言まで持っていきたいとのことである。

しかし、学校の教育現場では、多くの教師が現在の教育あるいは抱えている課題で手一杯状態であり、とても国際教育まで頭が回らないというのが現状のようであるし、文科省の方針においても国際教育にプライオリティーが与えられていないように思う。つまり、JEARNが目指すところと、現実の間には大きなギャップが存在すると思われる、それをいかに埋めていくのが今後の大きな課題となる。

私のボランティア活動

親の顔が見てみたい程 「最近の若者は外向き志向」

にしかわ ゆうじ
西川 裕治 (ABIC 会員、双日)

ABICの紹介で「ESUJ全国大学対抗英語ディベート大会」のチェアマン(本誌29号 2010年11月ご参照)をやり、それを機に、母校の後輩ESS部員を同大会に引っ張り出し、社内では、若手社員のグローバル化促進と英語コミュニケーションカアップを目指しSalon de Eigoという活動を立ち上げて遊んでいる。

てなこと「こいつは暇に違いない」とABICから目を付けられ、「今度は慶應の学生の面倒をみてよ」とのご指名。話を聞くと、世界各国にネットワークを持ち国際インターンの派遣や受入れの活動に取り組んでいる「アイセック(AIESEC)慶應義塾大学委員会」(以下、アイセック)なる学生団体からのプレゼン審査員の依頼だった。

アイセックは、2011年夏に14名のメンバーをインド、フィリピン、カンボジア、チェコ、ブラジル、カメルーン、モーリシャス、ウガンダに派遣し、NGO、教育機関や企業でのインターンシップを経験させた。また、メンバーの半数は海外インターン経験者で、海外との折衝業務や国内での資金集めなどもやっているらしい。英語力もTOEIC平均800点以上で日本の大学生としてはハイレベル。彼らの対応や言葉遣いも下手な社会人より結構まともで、物好きな私は引き受けることにした。

2011年12月3日(土)午後2時、浜松町の東京都立産業貿易センターにはアイセック・メンバー約50名と審査員18名が集結し、同年夏に海外インターンを経験した1年生3名が、その経験や将来の抱負などを熱くプレゼンした。大学1年生の夏といえば、高校を出たばかりで頼りないイメージが強いが、彼らの行動力は大したもの、「親の顔が見てみたい」と思ったほどだ。

さて、プレゼンの1番手は、チェコのビルゼンという町で活動した男子が登場。出発前にチェコ大使館に通い詰めで準備し、現地でも積極的に日本文化を紹介したことを語った。

2番手は、カンボジアの小学校で英語と日本文化を教えた女子。彼女は南アに住んだ経験から、帰国後にはノーベル平和賞のマータイさんにインタビューした経験もあるというツワモノ。

3番手は小柄な肝玉ガールで、インド南部のブネーでスラム街の子供たちに英語と算数を教えながら、現地NGOで資金調達のための広報業務を担当した経験などを元気に語った。



グループディスカッションにて筆者(中央)

日本では「最近の若者は内向き志向」といわれるが、今回の3名は海外生活や留学の経験を持ち、日本国内ではスポーツやスピーチコンテストなどでも活躍した経歴を持ち、消極性や内向き志向とは全く無縁で甲乙つけ難く審査は難航。ここだけの話だが、数ある評価項目は無視して？フィーリングで大胆に選んだ学生が1位となり安堵した。

続いて、5人程度のグループに分かれ、審査員もジョインして、「国際化の時代における学生のあり方」などのテーマでディスカッションした。ここでも快活で自由闊達な討議が行われた。

ちなみに、今回のイベントの様子は、iPhoneで撮影した動画がインターネットで世界にナマ配信され、グローバル化・IT化の現実を再認識。

日本の政治家、官僚や企業幹部の皆さんは、こんな時代の変化は当然ご承知だと思うが、なぜ日本がグローバル化で苦勞しているのか…。一度、ABICのボランティア活動に参加され、自らの老後のためにも、前向きな若者をご支援されることを是非お勧めしたい。



報告会参加者

私のボランティア活動

カンボジアの識字学校を訪ねて

たなか つよし
田中 剛 (元 伊藤忠商事)

ABICの紹介で、紛争予防活動を行うNPO法人のカンボジア事務所代表として、2001年より8年半プノンペンに滞在し、民間に残っている不法所持武器の回収廃棄、農村での灌漑用小規模ダムと橋の建設、僻地での小学校の建設、水不足地域でのポンプ井戸の掘削、小学校での水洗トイレの建設、少数民族に対する識字教育などの事業を行った。

中でも識字教育事業は、社会的弱者の立場におかれている少数民族が、多数を占めるクメール人と共存しながら、満足した生活を送るためには、彼らの教育水準を引き上げることが必須条件であるとの認識の下に、私たちが特に力を入れて推進した事業であった。

首都プノンペンからバスで約12時間、ラオス国境近くに位置するラタナキリ州には、独自の言語、生活様式を持つ少数民族の人たちが居住している。多くは伝統的な焼き畑農業で生計をたてているが、近年急速に経済のグローバル化の波が押し寄せ、生活内容が複雑化するにつれ、人々は否応無しに、国語（クメール語）算数などの基礎学力の習得を迫られようになった。

しかし政府は過疎地の教育まで手が回らない。そこで私たちは住民が手軽に参加できる学校を作ることにした。集落内に小さな木造の校舎を建て、教材文房具を無償支給し、教師は住民から選んで養成した。また教室にはソーラーシステムによる電灯を取り付けて、夜間授業ができるようにした。真っ暗な村の中で、学校だけポツンと明かりが点り、その中で熱心な生徒たちが唱和する声があたり一面に響き渡る様子は、村の希望の灯火であった。

ところが開校から何年か経った頃、我々のNPO内部にトラブルが発生し、組織存立の危機、対外援助不能、事務所閉鎖の事態に陥り、私はカンボジアを引き上げた。その後学校がどうなったか、確かな情報が入らず気になっていたが、昨年11月、3年ぶりに現地を訪問することができた。やはり心配していた通り、学校はすべて閉校していた。周



村の住民（先生）と一緒に

りに雑草が生い茂る中、校舎は無事だったものの、内部は農作物用倉庫、物置き場と化していた。黒板や机椅子は壊れたり失われたりして、授業が行われている形跡はない。

集まってきた人々の話を聞くと、私たちからの支援が途絶えてからまもなく授業は続けられなくなったという。彼らは、勉強がしたい、学校を再開して欲しいと口々に言う。それだけの熱意があるなら、どうして続けていけないのかと単純な疑問が湧くが、よく事情を聞いてみると、彼らにとって独力で学校を維持していくのは、至難の業であることが分かる。日々の生活の糧の確保に奔走している人たちにとっては、即効性の薄い基礎教育学校の維持に精力を費やしている余裕がないというのが根本にある。

端的な例として、支援中止により教師が無報酬になり、他の収入源を求めて村を離れてしまい閉校になった集落もある。道を切り開きレールを敷いて授業を軌道に乗せたから、後は住民たちでやれるだろうとの判断が甘かったと認めざるを得ない。私たちは目標として、本当に必要としている人たちに対して、必要なものをしっかりと届けるような、きめ細かい社会貢献活動をやろうと目指したにもかかわらず、現実是我々自体の問題も絡んできて、このような事態に陥ったことに胸が痛む。



教科書、地図、文房具を先生に渡している筆者

住民たちが自分たちで学校を建設中
木材は近くの森で取ったもの識字学校の授業風景
皆熱心に勉強している

ブノンペンに帰り、現地の状況と住民たちの学校再開に対する強い希望について、元スタッフたちと話し合った。再開するためにはどうすればよいか。そのためには住民の熱意と協力をベースとして、校舎備品の修復、教材文房具の調達、教師の再養成、支援ネットワークの再構築などが

必要であると確認した。ひとたび中断したものを元に戻すことは、そんなに簡単なことではないが、皆ができる範囲で協力し合えば不可能ではなさそうだ。継続は力なり。良い事は続けてやるべきだという当たり前の考えに立ち返り、この際今一度挑戦してみようと心に決めた次第である。



学校がある村
少数民族（タンブーン族）の独特の建物 高床式



ラタナキリの州都・バンロン市場
ここに少数民族の人達が作物を運んできて販売
買手はクメール人（カンボジア人）

事務局だより

ABIC会員懇親会（東京）を開催

2011年11月14日(月)18時～19時半、浜松町のメルパルク東京において会員懇親会を開催しました。正会員、活動会員並びに日本貿易会関係者など190名の参加を得て、檜田会長の開会挨拶に続き、市村理事長の活動報告および乾杯発声の後、活発な交流、懇親が行われ、盛会のうちに終了しました。



檜田会長開会挨拶



市村理事長乾杯発声

関西会員懇親会を開催

2012年3月1日(木)17時半～19時半、大阪三井物産ビル「季膳房」において開催しました。ABIC関西地区を中心とする活動会員約70名の参加者を得て、市村理事長の挨拶に続き、日本貿易会天野専務理事（ABIC監事）の乾杯挨拶の後、参加者の活発な交流が行われ、懇親を深めました。



市村理事長挨拶



日本貿易会専務理事（ABIC監事）
乾杯挨拶

新入会員（法人正会員）のお知らせ

2011年12月入会 兼松株式会社（日本貿易会 常任理事会社）

会員の種類

種類	内容	年会費
正会員	センターの活動を推進する個人、法人及び団体。 (理事会の承認を得て入会)	法人及び団体 1口 50,000円
		個人 1口 10,000円
賛助会員	センターの趣旨に賛同し、会費を納める活動会員、並びに個人、法人及び団体。	法人及び団体 1口 10,000円
		個人 1口 5,000円
活動会員	センターに登録し、センターの事業に参加しようとする個人。	不要 — —

正会員

団体・法人（18社）〈社名五十音順〉

〈10口〉 (社) 日本貿易会 伊藤忠商事(株) 住友商事(株) 双日(株) 豊田通商(株) 丸紅(株) 三井物産(株) 三菱商事(株)
 〈4口〉 (株) 日立ハイテクノロジーズ 〈2口〉 稲畑産業(株) 岩谷産業(株) 長瀬産業(株) 阪和興業(株)
 〈1口〉 兼松(株) 協同木材貿易(株) 興和(株) JFE商事ホールディングス(株) 蝶理(株)

個人（9名）〈入会順・敬称略〉

池上 久雄 寺島 實郎 小島 順彦 宮原 賢次 吉田 靖男
 岡 素之 佐々木 幹夫 勝保 宣夫 〈3口〉 小林 栄三

賛助会員

法人（3社）〈社名五十音順〉

(有) イーコマース研究所 (株) エックス・エヌ キーリサーチネット(株)

個人（429名）

下記は2011年11月以降にお申し込み頂いた方です。ご協力に深謝申し上げます。(敬称略・氏名五十音順)

〈2口〉 花岡 信明 米代 憲雄
 〈1口〉 浮貝 泰匡 坂本 章 野地 哲臣 藤井 義親 藤木 祥平 堀 正美 持田 修二

活動会員 2,194名

(2012年2月末現在)

賛助会員入会のお願い

ABICの活動にご賛同いただき、資金的な援助をしていただける活動会員及びその他の個人の方、並びに法人及び団体の皆様のご入会をお願い申し上げます。

会員入会のお問い合わせ・連絡先

特定非営利活動法人 国際社会貢献センター (ABIC)

〒105-6106 東京都港区浜松町2-4-1 世界貿易センタービル6F (社) 日本貿易会内

TEL : 03-3435-5973 FAX : 03-3435-5979 E-mail : mail@abic.or.jp